

平成3年度(1991)
個展を前提とした作品制作研究(9)
第9回個展・Gallery Work II in Naha

金城 満

1. 展覧会名:

金城満展・交差

2. 趣旨:

ランバーコアボードという新素材を基底材にした絵画作品14点を出品。キャンバスと異なり、グラインダーで削ったり、引っかいたりと様々な加工から絵の具の層が現れる。そんな絵の具の層が響きあう、音楽的な融合を試みた。

3. 材料技法

ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、テンペラ、油彩

4. 展覧会場

Gallery Work II

5. 展覧会期

1991年12月02日（月）～14日（土） ※12日間

6. 開館時間

11:00～19:00

7. 観覧料金

無料

8. 企画

Gallery Work II

9. 作品リスト

No.	作品名	サイズ (cm)	材 料	制作年月	備 考
127	Moon Hair	45.0 x 45.5 cm	ランバーコアボード、ニカワ顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
128	Moon Hair	45.0 x 45.5 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
129	Moon Hair	45.0 x 45.5 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
130	Moon Hair	45.0 x 45.5 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
131	Moon Hair	100.0 x 100.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
132	Southern Moon	90.0 x 130.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
133	つぎつぎ月月Ⅰ	90.0 x 90.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
134	つぎつぎ月月Ⅱ	90.0 x 90.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
135	つぎつぎ月月Ⅲ	90.0 x 90.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
136	つぎつぎ月月Ⅳ	90.0 x 90.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
137	ムンムン MoonⅠ	110.0 x 50.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
138	ムンムン MoonⅡ	110.0 x 50.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
139	ムンムン MoonⅢ	110.0 x 50.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展
140	ムンムン MoonⅣ	110.0 x 50.0 cm	ランバーコアボード、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1991年	第9回個展

10. 関連イベント

アーティストトーク

11. 考察（報道等資料）（pp. 11-16）

(1) 沖縄タイムス 1991. 12. 07 展評/自らの内側と対峙

金城満展を見る (学芸部/真久田巧記者)

(2) 琉球新報 1991. 12. 13 金城満展から/作品が音と融合

(DJ/四海健一)

(3) 沖縄タイムス 1992. 01. 06 12月美術月評 青山映二

(4) 沖縄タイムス 1992. 01. 08 金城満展・色の乱舞の果てに“玄”の世界観

(画家/真喜志勉)

(5) The Gallery Voice-No. 14

表現の背後に在るもの-金城満 (画家・美術教諭)

MITSURU EXHIBITION

1991
12/2~14
AM11:00~PM7:00

GALLERY WORK-II
2-2-4 IZUMIZAKI NAHA
OKINAWA JAPAN 〒900
Phone 098(855)7933

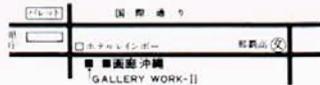


POST CARD

金城満展

●1991年12月2日(月)~14日(土)
(8日(日)は休廊)

画廊 沖縄 GALLERY WORK-II
那覇市泉崎 2-2-3 AM10:00~PM7:00 ☎098(834)6760
那覇市泉崎2-2-4(画廊 沖縄ナリ) AM11:00~PM7:00 ☎098(855)7933
(11月(日)は定休日です)





つぎつき月月I
90.0x90.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



つぎつき月月II
90.0x90.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



つぎつき月月Ⅲ
90.0x90.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩

つぎつき月月Ⅳ
90.0x90.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



MOON HAIR 1,2,3,4
45.0x45.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



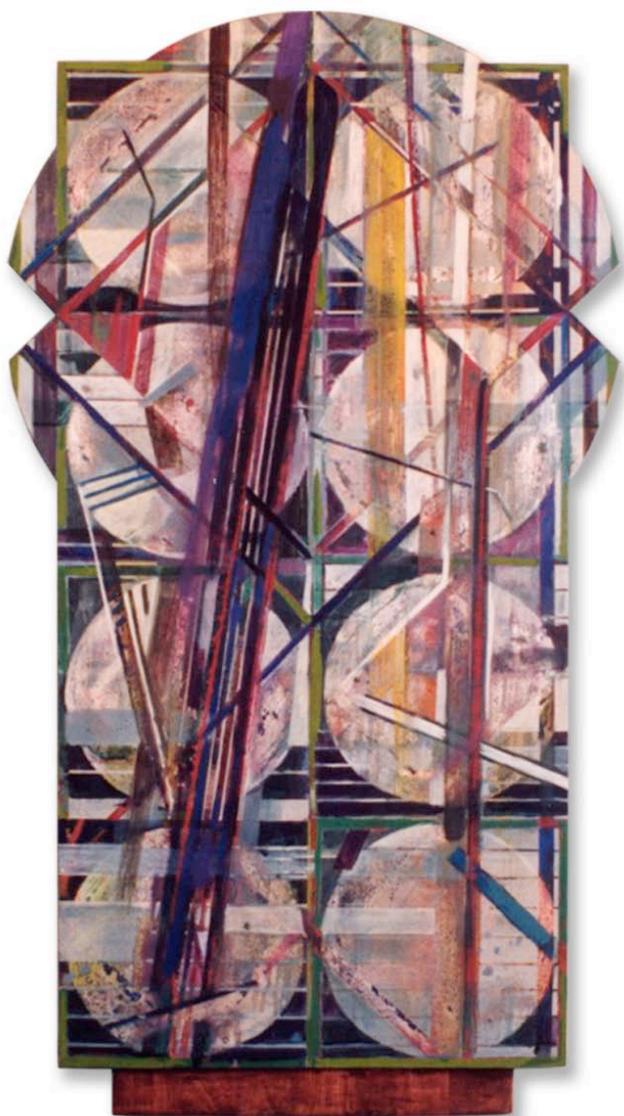
ムンムンMOON I,II,III,IV
各110.0x50.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



ムンムンMOON I
110.0x50.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



ムンムンMOON II
110.0x50.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



ムンムンMOON III
110.0x50.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩



ムンムンMOON IV
110.0x50.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ顔
料、箔、テンペラ、油彩

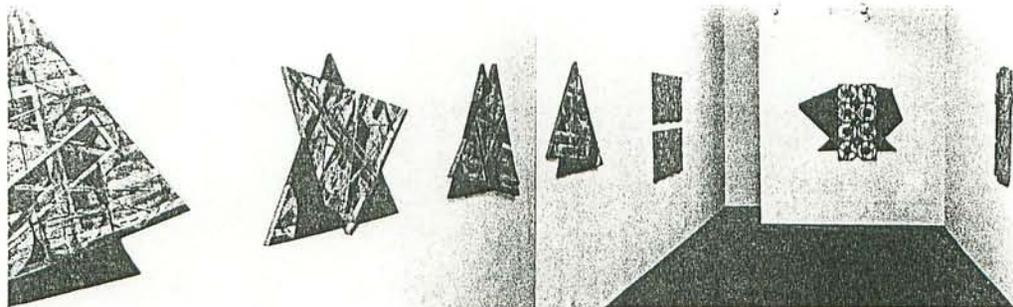


SOUTHERN MOON
90.0x130.0cm 1991年
ランバーコアボード、ニカワ
顔料、箔、テンペラ、油彩

ランバーコアボード使用の参考作品

①	つぎつぎ月月 I	90× 90cm
②	〃 II	〃
③	〃 III	〃
④	〃 IV	〃
⑤	Moon Hair	100×100cm
⑥	Southern Moon	90×130cm
⑦	ムンムンMoon I	110× 50cm
⑧	〃 II	110×160cm

①～⑧の材料：ランバーコアボード、ニカリ、顔料
箱、テンペラ、油彩



展 評

作家と読者の橋渡し役が美術記者の重要な仕事との基本認識の下に鑑賞の手引に多少なりとも役立てばどの思いで書いてきた。特に抽象絵画の世界は、予備知識なくフワリと展示会場に立ち寄った人にはどう楽しんでいいのか分からない。かといって作家本人に逐一解説せよというのも酷な話である。一方で「言いたいことは作品のなかにある。それを見てほしい」というのも作家の甘え(逃げ)と思える場合もある。世界の作家が実に多くの言葉を残し、それが研究者を通して世の美術

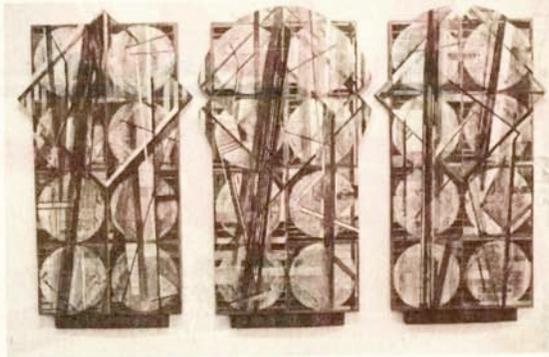
術理解に役立てられていることから、そう言えるのではないか。特に沖縄の作家は、語らなすぎた。風土性なのか。諷刺の文化が語らない国の文化になりえるのだろうか。若手抽象の旗手、金城満は語る世代である。スーパーの進出で地域のコミ情報が集まる場所としてのマチヤグラーが消えゆくといった復帰後の情報化世代の感覚を作品に反映する新しいタイプの作家である。「分かるのではなく、感じる」これが抽象絵画の楽しみ方のひとつで

あり、それゆえにより多くの言語が寄せられる作品のな幅の広さも保証されることとわかれる。金城の作風はそれをさらに一歩深める。大上段に構えたテーマ性とか美術思想などといった概念を「おじさんたち、もういいんじゃないか」と描いた物。銀箔に卵を溶かして使うテンペラで描いた物。銀箔(ぎんぱく)を張る作業

自らの内側と対峙

金城満展を見る

やない」とと軽く笑い飛ばして、自らの揺れ動く感覚のみを頼りに作品と呼吸をともにする。作品に何かかいてあるのかを探るのではなく、作品そのものを見る楽しみを味わう。フリーハンドでかかれた有機的な四角い枠のなかに無機的な丸、そのうえを画面から飛び出したり、吸い込まれたりしながら交差する線。作品は、表と裏にベニヤが張られた集積材の板に卵を溶かして使うテンペラで描いた物。銀箔(ぎんぱく)を張る作業



金城満作品—ギャラリー・ワークII

感じられた。今回はそうした体験を経て、枠がなければいけない不安といった感情を含め、内なる感覚を求めて自らの内側に向かい始めたような印象を受ける。

しゃべられている言葉の意味でなく、言葉がしゃべられていることに意味があるといった現代演劇の手法。それに共通するような感覚を提示する新人類の作家が金城満である。

(学芸部・真久田巧記者)

ある枠のなから飛び出すように世界がいつか金城の作品にはある。ことし三月、ギャラリー茶繪羅での個展では、各種、鮮烈な挑戦的姿勢が

金城満展は、十四日まで画廊沖繩のギャラリー・ワークIIで開催中。問い合わせ、電話098(855)7933、ワークII。

金城 満展から

四海 健一

那覇市の泉崎にあるGALLERY WORK II、今回は何を感じさせてくれるのだろうかと期待をしながら混沌とした空間の中に足を入れてみた。

作品が音と融合

感情を持つているかのよう
に、私の心を優しく受け止
めたりあるいは、厳しく跳
ねのけたりして線や円が描
作者である金城満氏のアバ

そこには体に落書きされ
た人間が何体も壁に張り付
けられているように、木材
でできた板が何枚も並んで
いた。

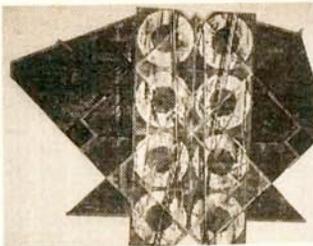
かれている。それとは対照
的に同じ板の上には所々無
た。
私事であるが、私はDJ
(ラジオのDJではない。

ガラスのような滑らかな
板の上にはさまざまな色

形や三角形に形どられてい
るが、必ずしも完全な長方

現在、豊見城村にあるCL
UB ECHOにて毎週金
曜日、DEEP HOUSE
Eを中心にPLAYしてい
る」という仕事をしている
が、職業柄なのか芸術作品

金城満展から「Southern Moon」



調されたベースやドラムの
それはまるで、極端に強
ICであった。

を感じる際、心の中に音楽
を入れてしまう癖がある。
今回の金城満氏の作品を
感じるにあたって、いろい
ろな音楽を試してみたが、
ほとんど空っぽ状態である
私の心の中で忠実に反応し
たのがHOUSE MUSIC
であった。

低音がうねるように打ち出
され、それによって巨大ス
ピーカーが敏感に反応する
のと同様、それらの作品も
小刻みに振動しているよう
に思え、アナログとデジタ
ルがうまく調和しているこ
れらの作品はHOUSE
MUSICにおける前衛的
な進行に共通するものがあ
ると私は感じた。

今後、さらにこのような
作品の形や色や線は、多目
肌に鮮やかなブルー、黄
赤などが横に入った「星座

がPLAYする音と融合
し、人々にまた違った角度
から感じてもらうという意
味が必要だと私は思う。
(同展は14日まで)

宮城勝臣作陶展

宮城勝臣作陶展(12月10
日、16日、沖縄三越ギャラ
リー) 現代の名工宮城氏
の今回の作品は、滑らかな

展 評



書・茅原南龍



金城満作品—ギャラリー・ワークII

金城満 個展 三角形の回転に戸惑い

パブルは弾(は)けた。能かつ安全なお遊(あそ)び車として出た。そのおおもは当然K
が、3台のオープンKカーで登場してきたのである。カーにも降りかかの高級化
が出た。軽自動車(軽自動車)はトランスポーターとしての役割(役割)である。そして
ついでの間で、トスキャ、飽和点(飽和点)そして船舶(船舶)と振動(振動)を別にトスキャ、
ルトーに始まる四十数万円に支えられて、スーパーカーに活路を見いだしたK
であった。トランスポーター車が統制(統制)し、セマンと言(言)う各社は、ビート、カプチ
ン、タダであったが、ここへも走り(走り)に高性能を發揮(發揮)し、1と言(言)った日本の技術(技術)
へきてオープンカーで高性能し、次々とスポーツカーも、経済(経済)なくしては事(事)な
ったであろう車を、ビュー

12月

美術月評

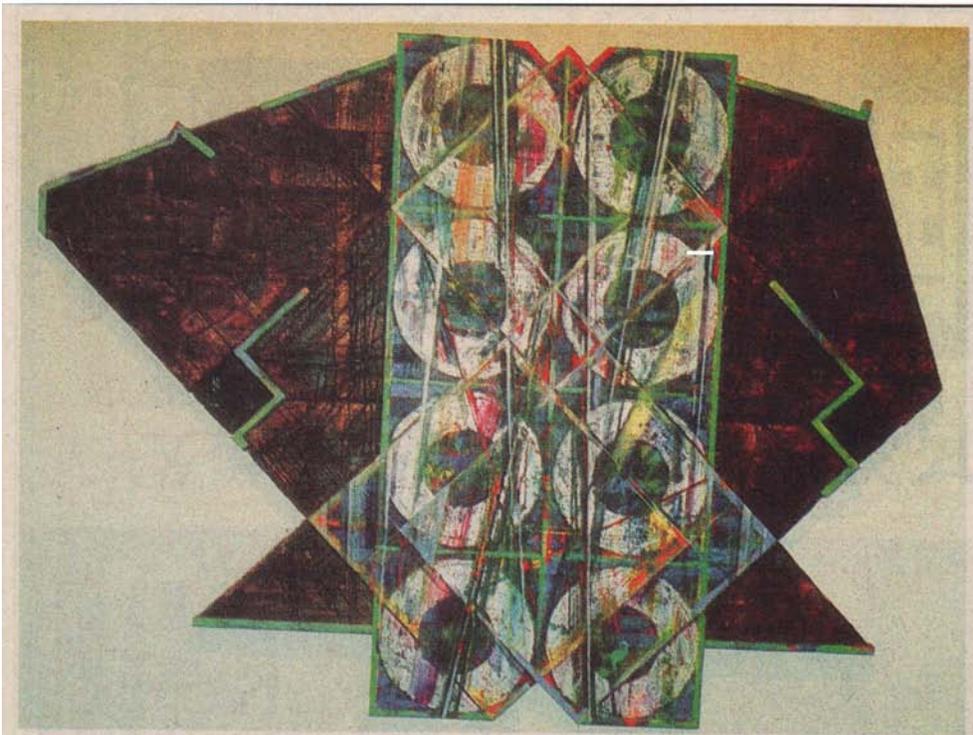
青山 映三

「メセナ」が登場して
る。個性(個性)不況(不況)の画家(画家)は、
ては不況(不況)に強いので、これ
をテロ(テロ)にミニマリス
ンてみようと思(思)っていたが、



重久村徳男作品—那覇市民ギャラリー

イハイ、ハンタリーの時期(時期)は、メディアムッドシッ
です。と言(言)われる。でも、Pの購入(購入)に踏み切(踏み切)った。拍
トキャスト(トキャスト)という(いう)のは社会(社会)
の経済(経済)動向(動向)に準(準)じていた。おう盛(盛)な活動(活動)を見せる
仕事(仕事)にならな(な)ど同業(同業)者(者)「金城満(金城満)個展(個展)」これまで
の仕事を踏襲(踏襲)しながら、性(性)に修正(修正)を見る(見る)べきな
展(展)型(型)を引(引)き出(出)した。工作(工作)か。これまで「平面(平面)の作
物的(物的)傾向(傾向)はこれまでにもあ
ったが、三角形(三角形)が回転(回転)して
トリッキー(トリッキー)に及(及)んでは方向



金城満展から「Southern Moon」

金城満展

色の乱舞の果てに 『玄』の世界観

GALLERY WORK
KIIで金城満展を見る。この人の個展はいつも新作である。多様な展開を見て来たが、一貫して浮遊感があり、スレの感覚、辺境性といったテーマが読める。多彩な色の乱舞の果てに『玄』の世界観が用意されていて、本人が意識するにせよ

しないにせよ、金城満はフリーイラストエッセイの一員であると同時にファミリィオファジァーの視座を認るために、創作行為を重ねているのだ。(画家)

訂正

6日付文
化面「アシヤギ」の同人誌名は「亜熱帯」の間違いでした。おわる。本人が意識するにせよ

表現の背後に在るもの

金城 満

夢遊病者のようなフワフワとした感覚。目を閉じてしかみえないもの、鼓膜が震えたと聞こえなくなるもの、息を止めないと噴けないもの。煮え切らないというのじゃなく生で十分食べられる。アンカーがスーッと重力の方向に降りていき、ピンッと糸が張る。

幼児期の頃こんな事があった。瓦屋根に上がり仰向けに星を見ていた。どれくらいだったかはわからないが、見たい星を見ようとすればするほど見えなくなり、その隙に目をズラすとそれが見えるのである。そんな事を繰り返していると、急に自分の身体が浮き上がり夜空へ落ちていく。次の瞬間、私の小さい手はギュッと瓦を握り締めた。背中に星間の熱を含んだ瓦を再び感じ、同時に距離感のない憂鬱と恐怖が凝込まれた。

「またまたユタムニーして……」と思われるだろうが、闇の中へ落ちていく、止め所なく落ちていく重力と反重力、そのバランス地点に自分がある。大事なものは皮膚一枚の境目、皮膚の裏側の触角である。細胞の一つ一つがうごめく自己を感じることである。

それらの感覚は訓練しなければ獲得できないだろうし、単に素質・才能だけに重きをおくのも素人的ではないだろうか。

では、それらの訓練の場所として学校現場の美術教育はどうかというと、例えば某新聞社主催による四面コンクールにあわせて年間計画を立てている傾向にあり、コンクールの「傾向と対策」に力を入れている。過去3度程、審査に関わったが、ある学年7000点余りをたった3人で審査したことがある。その年は極端な例ではあったが審査後は眼球が痛み作品をみるというより数をこなすのがやっとで、オマケに上位の選出は審査員同志の

力関係が顔をだし年配の方の意見で押し切られてしまった。その様な現状では美術教育に歪みが出無いはずはなく、大袈裟な言い方をすれば「表現」「芸術」という土壌が覆せていき、ふくよかな精神が育ちにくく「画一化」を助長しているように思う。これはもちろん私も含めた批判であり、大切なのはもっと表現の背後にある「何か」に目を向けるべきだろう。コンクールそのものの是非は複雑な



銀糸

問題もあり紙面の関係上この程度に止めるが(開口 健「裸の王様」参照)、本質的な問題は山積みで、皮膚一枚で大人も子供も騒いでいる。だから、学校をでた後「ゲイジユツなんてわかんない……」となる。その結果人間の本質が瘦せていき、皮膚だけが肥大化し隙間ができる。「空洞化」である。それよりも、まずはジーッと眺めて「ニタリ」とする。微妙なところを感じられる。その世界へ入っていき、そんな寛容さを持ちたいものである。

少し角度は違うが「空洞化」を栄養剤リゲインのCMに見る。Japanese Businessmanが故障した車を炎天下でスパークさせ、脳裏に日本の彼女が浴衣に線香

花火というのがあるが、この同じ火花でもまばゆいばかりの炎天下と、すべてを包み込む闇とのコントラストが現代のジレンマであり「空洞化」を30秒に凝縮させたものと言えるだろう。(よって逆説CM、悲哀をもった皮肉とも言える)

さて、人それぞれ「アンカー」を降ろす場所も違えば、深さも違うだろう。また、降ろさない人もいるだろう。私の場合以前にも本紙で発表した「遺伝子レベルからの表現」でありそれに組み込まれている情報を嗅ぐことだ。しかし、従来の「遺伝子は不変」であるという定説がくつがえされた。ビックリした事に、胎児から成人体へ成熟する課程で遺伝子DNAがバラバラになり再編成されるといふ。(ノーベル賞受賞者・利根川進、立花隆共著「精神と物質」参照)これはヤバイ、「オレの中にはウヤファーフジから受け継いできたアジアの風が吹いてるぜ」と発言したこともある。それが、バラバラになり、……なんて。

確かに、分子生物学という最先端科学は、闇に包まれた「生命」にそこまで光を当ててきた。しかし光の届かない世界があるはずで、バラバラになったなら「何が」それを再構成していくのか。そのメカニズムにはやはり「風」が吹いているはずだ。なぜなら重力の方向性があるように「種」の方向性があるはずだから。科学は「実証」により実感し、芸術は「表現」により実感する。私の中により強くアジアを実感したいために「表現」するのだ。民族主義というのじゃなく、うごめく生命感としての「まばゆいばかりの闇」をアジアと呼んでるにすぎないのだ。

闇の中にスーッと「アンカー」を降ろす。距離感がない。しかし……。

(きんじょうみつる 画家・美術教諭)

國場組グループ

國 和 會

会 長 國 場 幸 昇



ひとにいつも新しく 生活共感企業

りゅうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21
TEL 098-875-5000 FAX 098-875-0270